

「機関紙編集者クラブ」 6/20 映画評



「桐島です」

2025年/日本/G/1時間45分/監督:高橋伴明/製作総指揮:長尾和宏/出演:毎熊克哉(桐島聡)、奥野瑛太(宇賀神寿一)、北香那(キーナ)/配給:渋谷プロダクション

© 北の丸プロダクション



なぜ爆破事件を起こしたのか、なぜ孤独な逃亡生活を何年も続けたのか。桐島の胸の内はよくわからないが...

「罪と罰」を背負い深く孤独に生きた

2024年1月、末期がんで鎌倉の病院に運び込まれた内田という男が「私は桐島です」と言い出して大騒ぎになったこ

とは記憶に新しい。最期には本名で死にたいと言っ

た桐島聡70歳、連続企業爆破犯として指名手配されてからの逃亡生活は50年近くに及んでいた。映画は1974年の東アジア反日武装戦線による三菱重工爆破事件から始まり、時系列に沿ってやがて桐島が逃亡生活に入る様子を描いていく。学生だった桐島は中年になり初老となるが、その時間の流れの中で彼の日常生活は大きな変化も

なく繰り返されるだけ。一人暮らしの質素な社宅アパートから工務店に出勤し、たまには音楽パーティに入りしてギターも弾く。その日々の中でいつの間にか彼の部屋は荷物や電化製品が増えて「豊か」になっていく。結局のところ、桐島の胸の内はよくわからない。この映画がセリフでそれを語らないからだ。ただ淡々と二人の男の日常生活を描いていくだけ。普通の人のそれと違うところは、彼がいつもすくなく逃げられるように靴を履いて寝ていたり、パトカーの音に異様に敏感だったたりすること。あるいはビルが爆破される場面を何度も夢に見ること。何よりも、深い孤独を抱えていること。高橋監督は、「彼らがなぜあのような行動を取ったのか、わからなくていい。ただ、こういう青春があったということを描いた」と述べている。そうか、わからなくて

いいのか。いや、映画の中では確かになぜ海外進出企業を狙って爆破するのか、その理由は語られていた。ただ、その言葉は虚空を彷徨う現実味の無いものであり、観客にはひとつも響いてこないものだったのだ。むしろ、理解できるのは「人を傷つけたり殺したりするのはよくない」という若き日の桐島の言葉だ。アジアへの経済侵略と日雇い労働者の搾取によって肥える企業に対して、糾弾の声を上げる。その闘争には賛同するが、人を傷つけてはいけない。それが桐島の考えだった。逃亡生活を選んだのはなぜなのか、何が彼を生かす原動力だったのか、想像するしかない。「うーやん」「うーち」と周囲に親しまれ、ふだんは寡黙な彼でも、差別発言を耳にすると怒りを露わにした。恋してくれた女性もいたのに、彼女の気持ちに応えられない切

なきが胸を衝く。

見終わるとともに感慨が静かに漂う、それは最期に本名を明かして死んだ男が背負った「罪と罰」の悲哀だ。心やさしく、ひとに親切で戦が好きだった桐島聡、その深い苦悩を演じた毎熊克哉の瞳が心に残る。

エル・ライブラリー
(大阪産業資料館)
館長 谷合佳代子
▼公開日/7月4日(金)から順次公開▼上映館/〈大阪〉なんばパークスシネマ206(6643)3215、他、〈京都〉京都シネマ2075(353)4723、〈兵庫〉MOVIXあまがさき050(6865)3717、他

(11字×8行)